

円盤と宇宙哲学の研究誌

日本GAPニューズレター

1964

9月 - 10月

日本GAPニューズレター

— 1964 —

9月・10月号目次

通巻第24号

レインジャー七号, 恐怖、その他	G・アダムスキー	1
あなたはなぜこの惑星に生まれたのか	C・A・ハニー	9
ニューズダイジェスト		11
質疑応答	G・アダムスキー	16
推せん図書		20
生命の科学 3	G・アダムスキー	21
編集後記		32

レインジャー七号、恐怖、

その他

G・アダムスキー

だれも知っているように、今年になって米国から二個の月ロケットが打ち上げられました。そして、月面を撮影した写真類すべてが一体公開されるのだろうかと思はれています。こうした宇宙開発の大実験で何が達成されたのでしょうか？ 打上げのたびに公表されたわずかな情報を分析するにはそれを一種のハメ絵として見る必要があります。

数ヶ月前に月へ向けて発射されたレインジャー六号の結果として、われわれは積載されたカメラのすべてが故障を起こしたのだと聞かされました。しかし私は当時かなり優秀な写真が撮影されたという情報を入力しています。だが先回の「最近の情報」で述べたように、もしその写真（複数）が公開されたならば、少なくとも三十年は時代遅れとなっている古臭い教科書で今なお勉強している学徒のすべてを仰天させるでしょう。

レインジャー七号はこれとは異なる目的を有していました。すなわち月に人間を降ろすための安全な着陸場所を探る目的があっ

たのであって、それは達成されました。四千枚に及ぶ写真の中には、月面の広い地域を撮ったものもあったのでしようが、一般には決して公開されないでしょう。その理由も前述のとおりです。

しかしこの二個のロケットのあいだに起こった事柄は科学者や技術者が月に関して持っている知識にたいして重要なキイとなるでしょう。レインジャー七号が打ち上げられる数週間前に、ジャングル地帯着陸用の服を着た一団の宇宙飛行士がテレビの画面に出てきました。そのときの説明によると、月のジャングル地帯に着陸した場合にそなえて、この宇宙飛行士たちはこの世界のどこかの密林へ訓練に派遣される予定だということでした。月には草木がないというのに、なぜ彼らはこんな訓練を行なおうというのでしょうか？ 結局これは彼らが一般に公表されている知識以上に月についてよく知っていることを意味します。月面に密林が存在することを示す写真がなければ、その事実を彼らが知るわけがありません。

私の著書を読んだ人は知っているように、私は月の生命や草木について述べましたが、右の件は私の説を裏書きしているように思われます。

それならなぜ事実が一般へ公表されないのかと、あなたは思うでしょう。しかしその理由はあまり多過ぎて、ここに列記するわけにゆきません。しかし真相を知っている権威者たちは緩慢な教育法を用いて混乱の発生を防止しています。なぜなら、大衆は自分の理解していない物事を恐怖しやすいということを右の権威者たちは知っているからです。一般人は恐怖を身につけていますし、しかも完全に恐怖を脱した人はまだいません。

以下は一九六四年一月九日にノースキャロライナ州ウィンストン・セイレムの「トーチ・クラブ」で行なわれた或る講演の抜粋です。二十二ページから成る全文は政府の各機関と接触のあったアグニュー・H・パンソンが準備したものです。（訳注。パンソン氏については本誌八ページを参照されたい）

「聖書の時代にまでさかのぼる不可解な空中の物体に関する報告においてサムフォード將軍は次のように言明しております。『UFO（正体不明の飛行体）が確実に存在し、それは大気圏外から飛来するもので、敵意は持たないが地球人の力をはるかに凌駕した知的生物によって操縦されていると思われるという公式記録を米空軍や米政府が発表しようと思わないのは理由がある。もしこのような記録が公表されるならば大恐慌を起し、おそらく二十五年前のオーソン・ウェルズの小説に端を発した火星人来襲騒動以上の大混乱が発生するであろう』」

恐怖といえば、私は家族間のトラブルを並べたた多数の手紙を最近受け取りました。そのトラブルはみな理解力の不足による恐怖に基づいています。如何なる恐怖も理解力と信念の不足によるものなのであって、それは人間社会のあらゆる病毒の原因となつていきます。これは肉体の不健康の原因でもありません。なぜなら恐怖は信念でもって置き代えられない限り深く荒らし続けるガンのようなものであるからです。それは社会の不幸のもとをなす大敵であるといつてよいでしょう。多くの人はここで言うかもしれない「自分は恐怖心を持ってはいない」と。しかしそれでも正直に公正に自分自身を見つめるならば、自分の内部のどこかに恐怖が存在しているのを発見するでしょう。大抵の人は悪魔ばか

りでなく神をも恐怖せよと教えられてきたからです。なぜ人間は神を恐れなければならぬのでしょうか？ それは神というものが人間の理解力を超えているからです。そして恐怖はわれわれの文明に深く根ざしています。

歴史が報告している不快な状態のいずれも、個人から世界全体に及んで或る種の恐怖が原因をなしています。無数の生命が何らかの恐怖によって犠牲にされてきました。恐怖は国家ばかりでなく個人にもつかみかかるための道を縦横に敷きつめています。なぜでしょう？ 「恐怖とは創造主にたいする信頼感の欠如である」からです。このことは、人間は創造主たる神を信ずる一方、恐怖が主人となつているために創造主に頼らないということを証することになります。

人間はあらゆる物事を探究できます。たとえば冥想、祈り、断食などをやる人もありますが、恐怖が存在する限りこうした行法に価値はありません。なぜなら、われわれ人間は自分の本体を知らねばならないのに、恐怖はそれを妨げるからです。そしてわれわれは自分を知らない限り、自分の本体をも恐怖することになります。恐怖を除くどころか、人間に或る程度それを植えつけたい宗教はないということを私は知っています。インドその他の極東の諸国を見さえすれば恐怖に基づいた霊的な教えのために大衆が悲惨な生活をしている有様がわかります。

それで、個人を自由にし、自身を理解させるかもしれないような真理をひきつけて指導者が現われても、大抵の場合はその指導者にたいする恐怖が大きすぎて、個人は真理を見ることができません。私はこれまで多くの人と交際してきましたが、だれもが自

分を知るのに自分の弱さを見つめるのを恐れていて、墮落している人が多い事実を知っています。このことは一般人は自分の弱点を暴露されたくないということを示しています。換言すれば「恐怖は恐怖自体の暴露を恐怖している」のです。そして肉体の心はその暴露を避けようとしてあらゆる弁明をします。しかし聖書には「隠されているもので洩らされないものはない」とあります。それで、自由になるためには弱点の暴露が行なわれねばなりません。更に恐怖は「強さ」であるところの信念と置きかえられねばなりません。これまでしばしば述べたように、神の保障以上に大きな保障はないのです。

それではこの怪物（恐怖）からのがれるにはどうすればよいでしょう？ 人はゆっくりとしかも着実に出発しなければなりません。自分がだれかに悪い事をしたと思い、その「悪事」を見つめることを恐れている例が無数にあります。この恐怖に打ち勝つにはそれに直面できるほどの信念を持ち、一定の知識を有する必要があります。これは実例が何であろうともそれにかかわりなく実行されねばなりません。そのときそあなたは恐怖に打ち勝った主人になるばかりでなく、更に有用な若々しい生活を過ごすために肉体の諸要素を再編することになるでしょう。自我または個性という仮面の背後にある真自我を知り始めるでしょう。そして創造主にたいする信頼感是你がこれまで知らなかったほどに大きく生長し始めるのです。

自分のプライドを傷つけられることや常に不幸な状態であることなどからのがれようとするよりも、自分を謙虚にし公正であるほうがはるかによいのです。なぜならプライドや恐怖は間違った

物なのであって、宇宙の中に地位を持たないからです。

「生命の科学」講座は、それを（その講座を）実習している人々に右の悟りをもたらしつつあるという事実を感謝してここに報告したいと思えます。私は、人間の根本的な基礎が人間の注目を浴びたのはこの文明においてこの講座が最初だと断言してはばかりません。この知識をもたらしたブラザーズ（他の惑星の兄弟）に感謝します。その知識によって宇宙の高貴な魂の持主たちが元の住家へ帰ったからです。

無数の人が、ありとあらゆる名称の付けられた各種の方法（宗教や修養団体など）によって道を求めてきたという事実は明白です。そして求道者が如何に真剣であったにしても、それらは本人に混乱と生活の不安定以外の何物をももたらしませんでした。しかし、「生命の科学」講座を実習している多数の人は、わずか数ヶ月の研究で元の住家への道を歩み始めています。「自分自身を知れ。そうすればすべてがわかるだろう」という言葉をわれわれは何度も聞かされています。これは恐怖でなくして信念によってなされるのであり、心の指令でなくして意識の指導によってなされるのです。

このことは（自分を知ること）非常手段ではなくて真実の生活を送るためなのです。ところが今日の人間の振舞から見れば、これを学ぶのにさほど多くの時間は残っていません。なぜならこの世界を破壊してやるとおどしたのは悪魔ではなく、人間こそ同胞たる人間を信じないで恐怖心に支配されている世界を破壊するぞとおどしているからです。

七十才になる一婦人が過去五十年間あらゆる種類の宗教、心霊

団体、その他精神主義の各種修養団体をあざったと話してくれた
 ことがあります。彼女はただ自己を発見したいばかりに莫大な時
 間と金銭とを浪費したのです。しかし自己発見を達成するかわり
 に、各種の教義の渦中において混乱するばかりでした。そして人
 生の大半を、ただ自己の本体の発見のためにのみあらゆる物を喜
 んで犠牲にするという異常な生活をすごしたのです。しかし今や
 彼女は正常な真実の生活に返りつつあります。そして、生命の科
 学、講座の研究によって万物の一体性を理解し始めたために、心
 底から生活を楽しみ始めています。その講座は彼女が多くの教義
 の中に見出し出した恐怖を除いて、「真実」を置き代えたからです。
 そして今や彼女は自己を理解し始め、長く探し求めた自己の本体
 を発見しています。この他にもこれと同じような例が多くあるこ
 とを私はうれしく思っています。

円盤の目撃に関する報告

以下はメキシコ市のGAPリーダから送られた二件の報告で
 す。

△一九六四年六月十七日Vファレス市の上空に円盤(複数)が
 出現し、数百の人がその現象を見た。

他の惑星から来たと思われる二個の円盤が、昨夜ファレス市上
 空に目撃された。それはボル丘の上空に午後十時頃約十分間観測
 され、続いて市の上空を二十分以上にわたって旋回したり上下に
 移動するのが見られた。付近の数百の人がはつきりと見たが、物

体は円くて飛行機には似ていなかった。

△一九六四年六月四日V昨夜多数の人がエルモリシヨの空中に
 一個の輝く火の球を見た。それは大きくて、緑、青、赤色の光を
 帯び、続いて青い光線を放った。それがあまりに強烈であったた
 めに、北部運輸会社「のバスの運転士や乗客全部の目をくらませ
 た。そのため運転士はバスを道路脇へ突っ込ませた。

運転士マヌエル・マガリヨンの話によると、その物体はバスの
 上空五十ヤードのあたりを通過した。目撃者たちの意見はまちま
 ちである。宇宙船だという人もあるし、米国が打ち上げた人工衛
 星の残がいだと考えている人もある。

△私自身は(アダムスキーは)ケアリフオーニア州ジュリアンか
 らアグアガリエンテへのドライブ中に、二個の宇宙母船と十二個
 の円盤を目撃しました。また八月十二日午前十一時三十分、私
 はサンディエゴ付近の空中に巨大な宇宙船を見ました。火花を放
 っている宇宙船を見たのはこれが最初ですが、これは私が一九四
 六年の十月に見たのと似ています。このいずれにたいしても写真
 を撮る可能性はありませんでした。世界中で発生する多数の目撃
 事件の報告を私は受け取りつつありますが、このことはブラザー
 スが依然として地球人の活動を観察していることを示しています。
 粉争の起こっている地域では一層この観察が行なわれています。
 しかし今や何らかの粉争の感じられない場所は全地球上にほとん
 どありません。これは人間が次第に創造主の目的から離れてゆき
 つつあることを示しています。これが続けば或る種のカタストロ

フィー（大変動）に至らざるを得ないでしょう。個人と同様に国家もカルマを作ることになるからです。そして、創造主の目的は如何なる過誤をも受け付けないので、修正は人間にかかっています。これは必ずしも心地よいものではありません。しかし再度申しますが、恐怖が主人になっているというのに、果たして人間は修正がやれるでしょうか？

人間が生命—特に自分自身についても—とよく知っていたならば、直面しなければならぬ不快な未来を減じ得る機会はありません。しかし人間は時間をかけて自分自身や生の目的などを研究しようとはしません。人間のエゴ（自我）はあまりに自分自身の肉体の心に夢中になっているからです。そして過激主義が暴れまわっています。世の中で実際に何が行なわれているかを理解している人は少数しかいません。この少数者がその線を守って、大衆が自己破壊の方向へ突進するのを食い止めるかどうかは大きな疑問です。自尊心と金銭が人間の主人になるとき、神は人間の住家の中に居所がなくなるからです。しかし、生命は永遠であるということや自己の労力は神の計画になる家の中にあることを知っているその少数者にわれわれは感謝してよいでしょう。その少数者の持つ知識がそれを望む人にわかち与えられない限り、自分自身を理解することは充分にできないからです。

最近まで或る州立病院で働いていた一人の医師から私は一通の手紙を受け取りました。ここでは本人のために氏名や州名を明らかにしないことにします。この人は病医ですばらしい仕事をやっていたのですが、解雇されたのです。以下はその理由を述べた手紙の抜粋です。

「その精神病医の言葉を引用すれば次のようになります。『君は州の機構にとってはあまりに優秀すぎる。この州には君のような人を受け入れる態勢ができていない。君はあまりに活動的で、創造的で、まっ正直だ。君は政治的な策略を用いることを知っていないし、またそんなことのできない人間であることがはっきりしている』」

この人が病人を救うのに全く創造主の英知に導かれながら奇跡的な仕事をやっていたことを私は知っています。予想以上に急速に病人を常態に復せしめていました。しかし、自分たちの政治上の目的以外の何物にも関心を示さない政治屋たちがこのような施設を牛耳っている場合、どうして一個人が病人を救い続けることができるのでしょうか？ 以上は公僕と思われている人々の一例にすぎません。政治屋の汚ないやり方に屈服しようとしぬ多数者の中の一個人の例です。こうした状態は世界中の多数の公僕機関に存在します。政治屋たちはもはや人間または神の氣品を有してはいません。そして人間の善や愛は彼らにはわかりません。世界を現状のままに保っているのはこうしたクラスの人々です。極端に個人的な野望に支配されているからです。したがって諸国家を覆っている暗雲は銀色の裏面を持ってはいけません。（訳注。どんな不幸の中にも存在する筈の明るい半面が失われているの意）それゆえ「遅すぎないうちに人類は目覚めるだろう」と考えるだけでわれわれは精一杯です。

講演旅行

九月十五日に私はウィスコンシン州、イリノイ州、ニューヨーク市、ワシントン市へ向けて講演旅行に出発します。ニュージャージー、マサチューセッツ、その他の諸州へ行けるかもしれませぬ。したがって九月十日から十月二十五日まで私の宅における日曜集会を中止します。

私に関して或る種の噂が流されていますが、そのいずれも真実を伝えたものではありません。私が中西部の若い女性と結婚しようとしているというデマもその一つです。私の妻帯生活はすでに終わつたと断言しましょう。私は人生の残りを現在の仕事にささげていますが、これには独り身の完全な自由を必要とします。この自由こそ私に割り当てられた計画の遂行に不可欠のものなのです。(訳注。アダムスキーの妻メリーは一九五四年に死んだ)

質問に答えて

これまで私に協力してきた人、今後も協力しようとする人はすべて個人的な自由を有しています。私はだれにたいしても、私のラッパになってくれと頼んだ覚えはありません。理解を通じて各人の人格を発達させるために働いているだけです。しかし子細に観察してみますと、各人は神の計画か人間の観念か、このどちらか一方のラッパになっていることがわかります。率直に言いますと、各人は各人相互のためのラッパになっていたのであって、この表現しないと各人にはわからないでしょう。私自身は神の目的のためのラッパになることを選んでいます。

△問▽聖書に述べてある、許すこと、の法則について詳細を説明して下さい。

△答▽それは行なわれた過失の修正のための追加時間を与えるばかりでなく寛大さをも意味します。それは個人にたいして、宇宙の原理を受け入れてそれによって生きるための機会を次々に与えることとなります。各人は一つの運命を持って生まれていて、それを遂行するべき機会(複数)が与えられています。だれも知っているように、時間は無限にあります。機会には限度がありません。各機会は異なるものなのであって、これは個人次第で異なるでしょう。たとえば、あなたが宇宙の法則に従わないことによつてだれかを傷つけたならば、相手にたいしてすぐに修正を施さねばなりません。この修正を行なわない限り、あなたが如何に多種類の教義を研究していても、自己の真自我と進歩とを発見するのに障害が起こります。この発見は個人の自由意志でもってなされねばなりません。しかも他人があなたに代わって介入することとはできません。その修正をしないでいくら善行を積んでもそれは何にもなりません。聖書には次のような言葉があります。つまり、あなたが自分の持物すべてを与えても、生命まで投げ出して慈悲を持たなければ無意味だということです。ここで慈悲というのは報酬の観念を全然持たないで何かをなすことを意味します。ただ神の法則の一部であるからというのでそれを行なうのです。これは創造主が人間の何らの感謝をも期待することなしに日常の必要物をわれわれに与えているのと同様です。イエスも地上の報いを受け取る者は天国に入れないと言っています。だれもが良き物事を期待しますが、この世の報いのためにのみ働いた者はその

良き物事を見出しはしません。人間の法則は神の法則に反するからです。

慈悲、も、許し、もほとんど同じ意味です。誤った自尊心は、自分がおかした過失を修正するのを妨げます。そして人生の目的を遂行させなくして、修正をする機会を永久に失わせます。なぜなら本人が歩む道は傷つけられた相手の道と決して交叉することはないからです。しかも明日では遅すぎるでしょう。

さて、夏もまもなく終わるでしょう。今年はいままでにない忙しい年でした。少々くたびれましたが楽しい日々でした。世界各地から友人が訪問してきて、その結果彼らは知識が豊富になっています。私もまたそうです。日本からは一教授が訪ねて来ました。この人は英語の読み書きはできましたが会話は苦手のようでした。そこで本人は質問を紙に書き、私も書いて答えました。しかしこの方法がうまくいったのには驚きました。彼は与えられた知識に心から感謝していました。

それゆえ信念と意志があるところには常に道があるのです。信念とは生命が寄りかかっている「宇宙の岩」であるからです。そして内なる人間すなわちエゴを包容している人体を支えている性質は、人種、教義、自我の意見などに左右されない信念によって生きています。もしエゴがこの種の信念に従って行動しなければ、それは未来を持ちません。宇宙の実をみらせるのはこの種の信念であるからです。イエスが言ったように、実すなわち仕事によって、あなたは信念のある人をそれと見分けるであろうからです。また彼は言っています。良い実を結ばない木はことごとく切られ

て火の中に投げ込まれると。

生きる目的は宇宙的性質を帯びた実をならせることにあります。そしてこの夏やって来た訪問者たちの言葉によれば、彼らはこの分野で多くの仕事を達成したということです。私はその人たちすべてに謝意を表したいと思います。

私が講演旅行から帰ったならば、予定どおりの未来の段階を進むことにしています。メキシコへ行った際は来年ユカタンへの旅行を可能にするためにあらゆる方面へ交渉してみるつもりです。

この旅行はその地域にかつて存在したことのある過去の文明に関する知識を直接に得る目的を有しています。そこには他の惑星から来た人の子孫がまだ住んでいて、現在もブラザーズとコンタクトしています。また、私が見たい物だと思ふような物がそこにあるとも聞いています。それは現代の文明と過去の失われた文明とのあいだに存在している神祕を解消させるでしょう。

機会が来たときに、この探険に私と同行できる一団のメンバーを選びたいと思っています。今年末メキシコに滞在中、この旅行についてバスにするか汽車にするかを検討し、いずれか最上の方を調査します。汽車にするならば、一定の地区で停車したい場合に待避線へ入れることのできる寝台車と食堂車をチャーターする必要があります。もしバスにすれば、遠距離旅行にそなえて各種の設備をしなければなりません。したがってどちらか安上がりでよい方を選ぶことになりました。この探険行は一カ月ないし三ヶ月、または必要とあらばそれ以上続くでしょう。私は、この旅行に参加できる、時間的にも経済的にも余裕のある、正直なまじめな人々からの照会を望んでいます。そして関心を持つ人の数を知

ることによって予算を編成します。

先回の「最近の情報」で助手を必要とする旨を述べましたところ、多数の人から照会がありました。最初の助手たちを選んで以来、一人は多年とどまり、他の一人は二年間いましたが、彼らは最も必要なときに去ってしまいました。当時は調査から研究への推移期であったからです。ブラザーズは今それを選定しようとしています。

私はかつて会ったことのある四名の人と一組の夫妻がブラザーズのリストにあがっていることを知っています。この人たちはみな「計画」の遂行を望んでいるすばらしい人ばかりです。

メキシコの学園が来年いつか開かれるならば、協力者全員はその企画において何らかの地位が与えられることになると思います。多くの仕事が残っているからです。現在ケアリフォォニアの自宅には一人用の設備しかあまっていますませんが、もし要求が右のとおりになるならば自宅に設備をふやす必要があります。それゆえこれから六十日たてば、現在の本部で働く助手として右のグループのだれをブラザーズが選ぶかがわかるでしょう。

☆

☆

△編者付記▽ 右の記事に出て来るアグニュー・パンスン氏は米国の或る大会社の社長であり、アダムスキーの親友ですが、編者は一九六一年十一月十七日に京都でこの人に会ったことがあります。世界旅行の途中日本へ立ち寄ったわけで、夫人同伴で秋の京都、奈良を見物に来たということでした。編者とパンスン夫妻、それに米国の或る通信社の特派員であるトンプスン氏を加えた計



パンスン氏と編者久保田八郎 京都にて

四名はスエヒロで夕食をとりながら二時間ほど話し、更に場所を変えて編者とバ氏との二人だけで二時間ばかり語り合い、きわめて楽しい一夕をすごしました。このときの様子は本誌第二号に簡単な記事を掲載しましたので、ご記憶の方もあられるでしょう。談話の内容はほとんどアダムスキー問題で、このときバ氏が或る重大な情報を洩らしてくれたのが、当時意気消沈していた私を奮起させたのでした。彼はアダムスキーを心から尊敬していて、プロフェッサー・アダムスキーと呼び、経済的にも援助の手を差し伸べていると言っていました。バ氏は当時四十六才、大男で、豪放磊落な性格の持主であって、米国実業界や政界の裏面に精通した人です。このとき痛感したのは、日本の円盤研究家は米国の国情、

特に米円盤研究界の内幕に如何にうといかということです。アダムスキーは大ホラ吹きだインチキだと騒ぎたてているのはまだ可愛いほうで、懐疑派といってもピンからキリまであることを知っておく必要があります。イエスがそうであったように、真実のコンタクトは恐るべき陰謀と策略の渦中にあると言っています。『円盤研究』は、人間界研究」と同意語になるでしょう。

あなたはなぜこの惑星に生まれたのか

C · A · H · II · 1

今日或る種の人々は大きな問題に直面しているように思われます。つまり、「自己発見」を試みながらも、それを達成するのに見たところ自分が何も進歩していないのにひどく悩んでいるわけです。またなかには自分が一定の理由のもとにこの地上に生まれたことや、この人生で何か特殊な仕事をするために生まれたことを確信している人もあります。こうした感情のために本人は自分の現在の生活状態に満足せず、貧乏な暮らし方をして、自己の内部の焦燥感を満たすものを常に発見しようとしています。この人たちの地上の生命のほとんどはこの状態で消耗されてしまい、自分の疑問や問題の解答を発見できないままに終わるでしょう。たとえ古い疑問が解決できても、また新しい大きな疑問が起こって来

るのです。あらゆる人間は一定の理由と目的のもとにこの地上へ生まれて来ています。各人は努力しなければならぬ或る一定の予定された目標を持っています。私が言える限りでは、その目標が何であるかを意識的に知っている人はきわめて少数です。しかし一つの事柄だけははっきりしています。すなわち自分が行なおうとしている物事を実際に達成しつつあるのかどうかについて心配するのは全くの時間と労力の浪費であるということです。こんな

ことをしてわれわれが実際に達成するのは、自分にとって感受できたかもしれない有益な印象類のほとんどすべてを排除すること以外の何物でもありません。あなたが持って生まれた運命は、もしあなたがその（運命の）なすがままにまかせて心配することをやめるならば、それが（運命が）あなたを探し求めるようになるでしょう。

過去の歴史においてさまざまな時代に、衰微する文明の中へ新しい思想や目標を持ち込んだ指導者群が出現しました。これら偉大な哲学者のほとんどすべては一つの共通点を持っていました。概して人類は過去のレベルよりも高く発達しようとしているか、または自分たちが墮落した位置から元の高さに昇り直そうとしていることを哲学者のすべては説いたのです。「人間の墮落」に関する物語はこの点を説明しています。

「人間の墮落」の物語は、地球人の祖先が他の惑星から宇宙船で地球へ連行されたことを意味します。傲慢な利己的な厄介者たちは、この太陽系の内外の各種惑星の文明から隔離されてしまっただけです。彼らは地球で自力で生活するように仕向けられました。

聖書中にはこれと同じ伝説があります。ただしそれは古代バビロニアに起源を発する伝説であって、サタン及び第三の天使として描かれています。これらは自分の心が利己的になってしまった者たちで、この地上へ強制的にとどめさせられたのです。他の惑星からこの地球へ来る人はすべて聖書の時代には天使と呼ばれていて、サタンというのは実際には彼ら自身の利己的なエゴでした。このことからして、この惑星とその発達に関心を持った人に二通

りのタイプがあることがわかります。この地球へ連行されて元の惑星へ帰れなくなった人は「墮落天使」として知られるようになります。後には「人間の墮落」に関係あるものとされるようになりました。しかるに墮落しないで依然として宇宙の法則を活用していた人々は「天使」と呼ばれ、今日は高度に発達した惑星から来た宇宙人すなわち訪問者として知られています。

神学者や聖書の翻訳者たちは、長いあいだ「サタン」という語の真の意味を誤解してきました。サタンを超自然的な力を持つ生ける人間と考えている人があれば、ツノの生えた赤鬼だと思っている人もあります。もちろん真の解答は、サタンと訳された各種の語は今日教会が肉欲と呼んでいるもともと利己的な「人間の性質」に言及したものであるということです。これは言いかえれば「自我」です。

人間は本来自分のエゴが強いために地球上へ置かれたのであり、他の人々も同じような理由で地球上に生まれるのですから、われわれがこの惑星に生まれる理由はきわめて明確になってきます。あなたは一つの理由のもとにこの地球上に生まれました。すなわちさまざまな過程を経て「人間の性質」に打ち勝ち、それを変化せしめるほどに発達することがその理由です。多くの死と生まれかわりを経て地球の人間はゆっくりと進化の階段を昇っています。いつかはだれも「卒業」の時に達して次の高次な惑星で生まれかわるでしょう。

この地球の人間と高等動物とのあいだには大きな相違が存在します。動物界においては決して変化することのない或る自然の法則によってあらゆる物事が行なわれています。動物は本能に基づ

いて行動します。それは一定のパターン(型)に従うのです。人間はほとんど無限の推理力を持っていますが、動物は持ちません。人間は自由意志と自由選択権とを持っていますが、動物は持ちません。

自由意志と自由選択権はこの地上で展開している全面的な発達計画にとって全く基本的なもので、きわめて必要なものです。したがってだれがあなたを援助しようとするか、あなたがそれを受け入れるか拒否するか、進歩するか停滞するかは全く自由です。これは高度な惑星から来た指導者たちが自分たちの教えをだれにも決して押しつけようとしぬ理由の一つです。彼らはイエスのようにただ真価によって(つまり個人感情を加えないで)知識を提供するだけで、受け入れるか拒否するかは全く個人次第であると語っています。なぜこうしたやり方が必要なのでしょう？

それは、自分の性質を作るのに役立つところの人生の真のレッスン。個人が実際に学ぶ唯一の方法であるために必要なのです。個人を各種の異なる生き方に強制的にあてはめようとしても無駄です。個人が多年のあいだ同一の思想や哲学を習慣的に信奉している場合は特にそうです。何かの新しい思想が個人の心を捕える前に先ず本人は新しい、または異なる物を自分から望む必要があります。本人は自分で解答を求めなければなりません。それを無理矢理に或る知識を押しつけようとするれば、本人は力一杯にそれを拒絶するでしょう。個人的体験を通じてのみ人間は学ぶことができるのです。「中古品」的体験や啓示は役に立ちません。

動物が推理力を用いないで盲目的な本能に従っているのと同じ

ような調子で、なぜ人間も本能によって宇宙の法則に従うように創造されなかったのかとあなたは考えるかもしれません。その答はやはり簡単です。もし人間が自由意志や推理力を持たなければ、ロボットと同じになります。進化などはありません。創造されたときの一定のレベルにとどまるだけです。指導的な能力を有するほどに発達することは不可能になるでしょう。

進化とは実際には人間の性質と健全な道徳の原理を發展させることにほかなりません。それは行為と体験とによってなされます。こうして進歩してゆくと、われわれは結局健全な性質と道義とを發達させ、指導者にまでなれるのです。他人を自身の意志のままにやれるように仕向けることが必要なのであって、同時に本人はレッスンまたは過失から学び取る力を持たねばなりません。こんなふうにして絶え間なき發達があるのであって、結局われわれは宇宙を支配する、支配的な力の一部になれるも、くろみがつくわけです。それがこの發達の段階におけるゴールです。

あなたの潜在意識は、体験によって学ぶのに如何なるレッスンが必要かの知識を持ち運びます。あなたの人生のいろいろな場面に、物事が、ただの実験台になるために、現われるでしょう。そして自分の真の運命を遂行するのに必要な環境を与えるための適当な人物や仕事に出会うでしょう。問題を強行しようとしてははいけません。さもないと必要な出来事の出現を遅らせるだけです。急がずにゆったりとした気持で自分の興味をひく物事を研究しなさい。自分を知らうという食欲さを捨てて生活を楽しむのも一方法です。そうすれば適当な時機に適当な物事が現われるでしょう。

ニユースタイムズ

月と火星は地球とコンタクトを望んでいる？

かねてから月面の山々に観測される閃光や火星の表面に見られる光斑などが問題になっていたが、これについては最近帰宅途中の若い夫妻が一個の神秘的な光体に追われたのがきっかけとなって再び話題となっている。

しかし米空軍は例によってこの夫妻の見た光体をその月中夜空に輝いていた木星だと片付けてしまった。だが空軍は、夫妻の報告した体験、すなわち光体が車のラジオに影響を与えたり、ヘッドライトを暗くさせたりしたという現象を、地球から四億三千万マイルも離れた木星が一体どんなふうにしてそれをやったかは説明していない。また空軍は過去から月の表面にきらめくのが観察された神秘的な光（複数）についても筋の通った説明をしていない。科学者もそれらの説明には当惑しているのである。

一九五六年一月十六日に、ケアリフォーニア州ウッドランドの一天文学者によって、月の西側のフチ付近の裏側から連続的に輝いている白色光が発見された。その光は約一時間半ほど続いた。またその年の一月二十四日には月のケアヴェンディッシュ火口の東側壁面上に閃光（複数）が見られた。そのとき火口は太陽の光を受けて暗黒の中から出現するところであった。閃光は約三分間強烈に輝いたが、その後次第に消えてゆくのに八分かかった。各閃光の短い合間に火口の壁よりも少し輝度の高い光が出現した

ことよって閃光の位置が確認された。すなわち各閃光のあいだに火口の西側の壁に反射光が見られたのである。

以上の二件の報告は月からの信号と解釈してよいかもしれない。しかし閃光が規則正しく出現するのは、単に一定地域へ注意を引こうとする方法であつたかもしれないことを暗示している。

一九五九年四月十九日には、月面に連続的に輝いていた一つの白い光がケアリフ・フォーニア州スタンフォードから観測された。それは日光の陰になった月の暗黒の部分の中に見えたので、山頂に出現したものとは考えられない。一分三十秒ほどジッと輝いた後、数秒かかって次第に消えていった。これこそ月からメッセージを送ろうという実際の試みであつたのではないだろうか。電波に似た方法で一定の光線を交調できるから、これで知的な信号が送信できるのである。

火星上に観測される活動は、月面上の発信者と思われる者の「出身地」を暗に示しているのではあるまいか。

一九五四年一月一日に、火星の赤道にあるエドム・プロモントリウムと呼ばれる砂漠地帯が日本から観測されていた。すると突然そこが急速に輝き始めた。三秒ほどで明るい黄色から強烈な白色に変わり、更に五秒後に通常の黒色にもどつた。これは火星からのロケットの発射とも考えられる。しかしそれから半年後の一九五四年七月二十三日に火星上の同じ場所で発見された活動は少々別なふうに解釈される。今度は光輝が三十秒間で強さを増し、次いで五十八秒かかって次第に弱くなり、ついに消えてしまった。これがロケットの発射とすれば、光輝の時間の長さは強力なロケットを意味すると思われる。別な可能性は、原子エネルギーの実

験が行なわれているということにある。

しかし近年の観測で最も驚くべき現象の一つは、一九五六年九月八日に、火星付近の空間に現われた一個の正体不明の物体であつた。その日、ニューメキシコ州の一天文学者によってその赤色の惑星が観測されていたとき、かすかな光点が望遠鏡の視野を横切つたのである。それはその惑星より少し下方であつた。その神秘的な光点が望遠鏡の視野を横切るのに十秒を要し、角度約五分の弧をえがいた。これも火星の成層圏を飛行体が飛んだのを始めて観測したのだとも考えられる。もちろん火星の衛星フォボスとダイモスは或る人々によつて人工的な物だと信じられている。この二個の衛星の色は濃くも淡くもない灰色であつて、自然界の物質にしては異様な色である。またこれら衛星の公転周期は中空の物体としか考えられないような周期である。しかも一七〇〇年代以来かなり強力な望遠鏡が火星を観測したのだけれども、衛星そのものは一八七〇年に始めて発見されたのだ！

以上のあらゆる観測はわれわれを一つの結論に導くように思われる。すなわち地球の周囲の空間及び太陽系の内惑星を取り巻く宇宙空間には、自然界の物でない「何か」が存在するという結論である。この「何か」は火星から来る知的生物のあやつる航空機なのかもしれないし、それともこの銀河系の別な星々から来る「異人」なのかもしれない。説明はどのようにつくにしても、今日「は生き甲斐のある大いなる時代である。地球人の夢想もしない神秘や異常な事件がわれわれを取り巻いているからである。」(ナショナル・インフアーマー紙、六四年三月八日付。科学部長バート・グロース記)

再びニューメキシコのUFO事件について

ニューメキシコ州ソコロの着陸事件（訳注。本誌今年五月・六月号に記事を掲載）に関する世論では、あれは米国の超極秘の新型航空機だったということになっている。ところがニューメキシコ大学流星研究所のリンカン・ラパス博士は「この苦惱に満ちた惑星（地球）よりも別な世界に住んでいる人間が、地球へ来ることのバカらしさを示しているのかもしれない」と言っている。

ロサンゼルスではテレビの第七チャヌルが数日間UFOに関する連続物を放送したが、そのテレビのニューズでは、ニューメキシコ事件について新聞に報導されなかった情報も伝えた。たとえば、或る新聞は「警官ザモラは、白い作業衣らしき物を着た二人の人間が機体の近くで空間に浮いていた」と書いているし、「人間のいる気配はなかったが、白い作業衣らしき物を着た人の姿が地面に横たわっているのを見た」と報導した新聞もある。ところが第七チャヌルはニューメキシコで直接にザモラと会見した模様を放送し、その中で、ザモラは次のように述べたと言っている。「私は二人の人間を見ましたが、その内の一人は機内へ入る前に私の目をジッと見つめました」現在まで米空軍はソコロ事件を真実のUFOとしてリストにあげているという。

数週間前のUFO騒ぎの最中に、アナハイムのC・A・ハニー宅から約十マイルの地点で、二機またはそれ以上の「アダムスキー型円盤」の着陸事件が発生した。この地区の住民数名がこの事件を新聞社に報告したのである。詳細は判明次第に掲載の予定。ところで新聞社の知らない新事実が明るみに出た。それは着陸事

件と同時にその地区へ見知らぬよそ者が入り込んで来て、急に居民の数が増加したという事実である。事実は小説よりも奇なることはよくあるのだ。（C・A・ハニー発行の機関誌六四年八月号より）

土永夫美夫氏の不思議な体験

和歌山市東河岸町二の三八に在住される土永氏は編者の親友で、円盤の研究活動においては久しく苦楽を共にした間柄である。オフセット印刷に使用する亜鉛板の製造工場を経営され、実業家としての敏腕を振るう一方、常に高い求道精神を内に秘めて、あらゆる思想団体を遍歴し、現在はアダムスキーの哲学に傾倒される人格高潔の士であると先ず紹介しておこう。

さてこの土永氏は数年前から自宅上空にしばしば円盤が出現するのを目撃されるようになった。もちろん多年円盤研究を専門的に行なってきた氏のことであるから、いい加減な物体を見誤って円盤と断じ、わけもなく感心するような氏ではない。豊富な知識と冷静な観察眼により毎回観測するうちに、このような度重なるUFOの飛来には何か特別な意義があるのではないかと感じるようになった。目撃は氏ばかりでなく家人や近隣の人々もときどき一緒に行なっているのだ、証人はそろっている。そうした体験の報告を折にふれて編者のもとへよこしておられたが、ただ奇妙の一語につきるだけで解釈のしようがなかった。

ところで話は昨年秋にさかのぼる。十月五日夕刻五時頃から、魚釣りの好きな氏は函中矢印の海岸へ夜釣りに出かけたのである。

そこは双子島を眼前に見渡す小さな入江の突端であって、眺望絶佳の場所である。静かなたそがれどきを釣糸を垂れながら暗くなるのを待っていた氏は、ふと見上げると、双子島からやや西方の空中に母船型の雲の如き物が浮かんでいるのが目についてハッとした。あるいは母船ではないかと考えながらしばらく眺めていたが、よくわからない。やがて暗くなってから遠くの茶店にカーバイドランプを忘れたのを思い出し、同行した友人が取りに行ったあいだに UFO が一機飛来して、その位置のやや南方を東北東へ向かって数秒間かなりの早さで飛び、上空へ急速に消え去った。

一人になった氏が水面を見つめていると、突然暗闇の中を背後のガケから一人の男が飛び移って来て氏に声をかけた。ここに釣竿の袋が見当らなかつたかと言う。見なかつたと答えてから強い手応えを感じて竿を引き上げたが、針は取られていた。するとその男が電燈を指し向けてくれたので針を付けていると、相手の男は、自分は釣が好きでこのあたりへよく来るが、まだ針の付け方も糸の結び方も知らないと言う。そうこうするうちに友人がランプを持って帰って来た。まもなく、ふと空を見上げると母船型の雲（？）の出ていたあたりから円盤一機が再び出現し、今度はゆっくりと真上からやや南寄りや東南南方面へ数分間飛行し去った。「円盤ですよ！」という氏の声に釣友は驚いて空を振り仰いだが見知らぬ男は事もなげに一べつをくれただけで、黙って立っただけで、その後数分間経って「ごゆっくり」の言葉を残して男は元の方向へ引き返して行った。ところが男が去ってから土永氏には疑問が雲のようにわき起こってきた。(1) 男の言葉は聞きなれぬ標準語であり、もの柔らかな、人なつっこい話しぶりで、静か

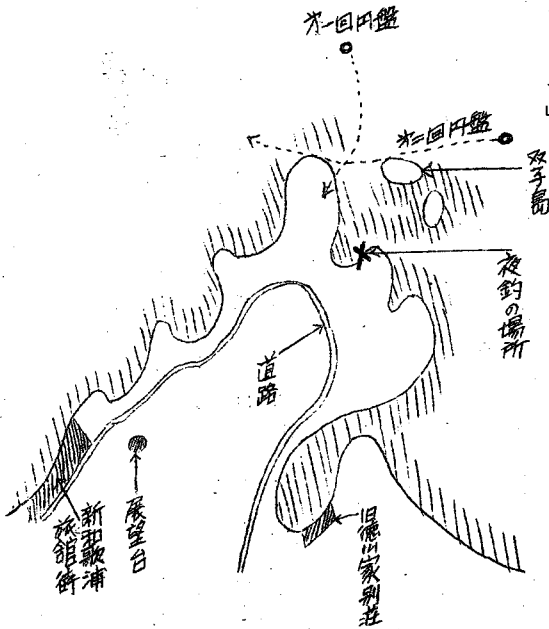
な態度を保ち、引きつけられるような印象を受けたこと。(2) たびたび釣に来るといふのに針の付け方も糸の結び方も知らないこと。子供ならともかく、三十数才に見える年輩で、しかも一人で夜釣に来るほどの者なら針の付け方やテグスの結び方を知らぬはずはない。ましてその場所は、特に夜釣の場合は、よほどのヴェテランでないとならないような絶壁下の危険な場所である。(3) 男の現われる直前と話中に円盤が出現したこと。(4) 夕なぎの西空にきわめて輪郭のはっきりした母船型の雲の如き物がかなり長時間滞空していたこと。それは暗くなっていつしか見えなくなった。

以上のような次第である。ここにおいて土永氏は大いなる疑惑に包まれてしまい、徹底的な推理のもとに或る一つの結論に達したのであるが、その後これに類似した事件は発生していないという。ありふれた体験をやたらに神秘視するような氏ではないから、その事件は相当な内容のものであつたと思われる。更に奇妙なのは、その日以来円盤の出現がバツタリとまわつてしまい、氏はますます考えざるを得なくなつたが、今年七月二十一日から俄然夜空に円盤の出現が再開されるようになった。同日午後八時四十八分頃、約五分間にわたって自宅裏西南の方向より真北に一機飛来、それ以来二十三日、二十五日、二十八日、三十日と連続の出現で、当初は西南西方面から真北への飛来が主であつたが、最近はほとんど北斗七星の中央付近から真東、またはやや南に大きくカーヴをえがくことが多く、ときに停止または急上昇、消滅といった現象も見られるという。次に、九月六日付の氏からの書簡の一部を引用しよう。

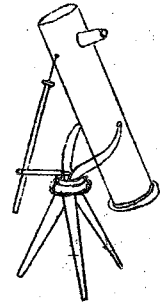
「円盤の来訪は相変わらずでして、雲のない場合はほとんど毎

日、ときとして雲の切れ目を縫って飛ぶことがあります。来訪のたびに私の家族の者はもちろん、近所の人たちにも知らせて共に観測いたします。私のすすめでほとんど面白半分某団体に入っていた人たちも実際に飛行の状態を見たことがないという方が多く、川口宝四郎氏御夫妻もその二人ですが、或る別の用件で私の宅を訪れ、雑談中（円盤の話などを）、私がフト席をはずし、裏縁に出たトタン一機飛来し、約五分間近くも観測いたしました。また近所に住む小谷民代という御婦人もその一人でして、大阪に住む私の末弟も私の宅で始めての経験だとしきりに感心しておりました。GAP誌友片平君御兄弟も私が訪れた夜始めて目撃されました。以来円盤来訪日誌が作られ、私と変わらぬほどの観測を続けておられます。特に不思議なことは、八月十九日の夜、隣家の中学三年太田君と共に市の北区を西に流れる紀の川の土堤上で観測いたし、八時三十分頃、六十谷大橋々上で北斗七星よりやや左方より一機、ゆっくり東方へ、この間約十八分程度観測後帰途につき、途中片平君を訪ね、円盤の話をしていました折、片平君のお父さんが、それは人工衛星だろうと言われ、なかなか合点がゆかない御様子など承りましたが、話に夢中になり、十時近くにもなりました頃帰宅すべく外へ出たトタン、当の片平君のお父さんが裏口から出て参られ、「円盤です！」と言うので、一同指差す方向を見ますと、北斗七星よりやや東に一機ゆっくり東方に向かい、ややしばらく（数秒）停止後、今度は東南南に大きくカーブして消えました。この間約五分以上と覚えています。雑誌の折、人工衛星は一直線にしか飛行せず、停止またはカーブを切ることなどはとてもできないし、出現方向、時刻にしても一定して

いる旨話しましたが、まるで私どもの話を聞いていたかのような出現、停止、カーブ、消滅を見せてくれました。しかもこのときは否定的な当人である片平君のお父さんの御発見でありましたことです。—中略—最近では九月三日午後七時三十分頃自宅裏西南に一機ゆっくり東方へ出現し、約三十秒ほどして更に一機やや南方に現われ、これはかなりの速度で東南方に飛行し去りました。最初の一機は至極ゆっくり飛行、真南の方向に来て停止一分後東南に向かい、やがて付近の雲にかくれました。この夜の如く同時に二機現われることは全く珍しい現象です。円盤日誌も私なりの至極ズサンなものです。御入用でしたら別記してお届けするにといたします」



質疑応答



G・アダムスキー

問 宇宙人に協力していると伝えられている大白光教団—これはセヴン・レイズ友好団ともいわれていますが—について、あなたはどう考えていますか。

答 あれは完全な虚説であって、こんなばかげた説を支持した人のなかには、疑惑を起こして互いに争っている人々もあります。宇宙人は白光だの黒だのという教団と何の関係も持ってはいません。

問 あなたが会った宇宙人は、過去のミュー大陸の遺物と考えられている太陽円盤や、上空からでないと思えない南米の大マルカウアシ高原の秘密の遺跡について知っていますか。

答 例の黄金の太陽円盤は今日見られるのと同じ種類の普通の円盤です。黄金色に見えるのは、技術上、気象上の条件によるのです。マルカウアシの遺跡は、かつて宇宙人が生産のために寄与した多数の施設の一部です。

問 宇宙人は、『第三の目』を持っていますか。彼らは人間のオーラや万物から出ている放射線を見ることができですか。

答 全部「イエース」です。『第三の目』というのはテレパシーにたいする宗教的な表現です。人間のオーラは人体の磁気放射線ですが、これは自然界の万物が放射線を出しているのと同様です。あらゆる人間はこの三つの機能をそなえているのですが、自分自

身を理解していないためにこれらの科学的な意義を知っている人はほとんどいません。

問 他の惑星の音楽は地球の音楽に似ていますか。私は特にドビュッシーが思い浮かんでくるのですが。

答 なかには地球の音楽に似たのもあると言つてよいでしょう。しかしやはり、『よい』のもあれば、『よくない』のもあります。たとえば金星を例にあげると、その音楽は地球のそれとは異なっています。これは楽器とその相互作用に関する知識がはるかに進歩しているからです。

問 『フライイング・ソーサーズ・フロム・マーズ』(邦訳『続空飛ぶ円盤実見記』高文社刊)の著者であるセドリック・アリンガムについて何かをご存知ですか。一九五五年にスイスで消えて以来、だれも彼を見た人はいないようですが。

答 知りません。彼は私を訪ねるために米国へ来ることになっていたので、その直前に消えてしまいました。(訳注。セドリック・アリンガムはスイスの或る療養所で死亡したという説が流れたことがあるけれども、スイス、パーゼルのGAPリーダー、ルウ・ツィンスシュターク女史が調査した結果、そのような事実はないことが判明したという)

問 宇宙人は核エネルギーを何かに利用していますか。

答 利用していません。しかし地球人とは違って、破壊的な目的に使用しないで、建設的な応用法を見い出しています。

問 この太陽系には超現実的な社会がありますか。われわれはときどき空間に消滅する人間のことを聞きますが、これは地球人を侵害している、程度の低い、宇宙人ですか。

答 いや、この太陽系にはそんな超現実的な社会はありません。人間が空間に消滅する例のほとんどは、その人間の自由意志に基づいたものです。それ以外の消滅事件についてはよく知りません。とにかくわれわれが知っている宇宙人はそのような事件とは関係ありません。

問 われわれは至上なる英知というものを、多次元の普遍的な自我であろうと考えていますが、なぜ宇宙人は人格化された「神」すなわち「創造主」の概念に固執するのですか。

答 「神」は人格化したものですが、「創造主」はそうではない。ユニヴァースには限界があるけれどもコスモスにはそれが無い。

「自我」は人格化されたものだが、「父」はそうではない。実際には、われわれが「創造主」というところを宇宙人は「宇宙の英知」という表現を用いています。

問 地球人のあいだに混じって住んでいる宇宙人は、滞在している国の戸籍をどのようにしてごまかしているのですか。彼らが地球にいて働いているとすれば、課税という問題が早晚必ず起こってくるし、本人の出身地が追求されるような問題も多く発生するでしょう。たとえばあなたが交通事故にあったとすれば、当然住所、出生地などを調査されることになるはずですが。

答 各国に常時住んでいる宇宙人は、自分の正体が周囲の人から「気付かれない」としても、結局ごまかし通すことはできないでしょう。そうでない場合には、彼らは自分で所持している「書類」を用いて長期間うまく切り抜けることができますのです。

問 宇宙人は総体的に地球人にたいして彼らの存在を知ってもらいたがっているのですか。もしそうだとすれば地球人に証拠を得

させないようにするのは誤りではありませんか。たしかにわれわれは宇宙人が力を行使しないことを読んで知っていますが、数百万の人間を殺すかもしれないような地球の危険な科学実験を考へるとき、五大強国の政府にたいして強制的に道理をわきまさせるのは誤りにはなりませんか。

ソ連で原子砲の部品を作っている工場を円盤が破壊したという情報は、結局円盤といえども地球人が作る物と本質的には大差ないということを示しています。教育とか知識とかいうものは、路上にいる人やその仲間を正しい方向に行かせないのではないのでしょうか。

答 証拠とは一体何ですか？ 宇宙人がわれわれになし得る物事には限度があります。情報を流し得る国は強国に限るということ忘れてはなりません。弱小国は沈黙させられるのです。強大な国々は十分な証拠を持っています。それをただ秘密にしているだけです。自国の多数の人が欲しがっている証拠のすべてを入手しているのです！ しかし大衆は政府の秘密政策を変更させることはできなかった。全然できはしない！ だからわれわれは真相をもたらしような状況の進展を待つ必要があるのです。つらいことですが、仕方がありません。

東側や西側の或る種の工場や武器を円盤が破壊するのは、正しい時と場所における警告なのです。警告の目的について疑念の余地があり得ぬようにするためにそうするのです。

問 もし人間が宇宙の意識に到達しないで、次のクラス（訳注。生まれかわるべき場所）のための準備ができないままに死ぬとすれば、本人は一定の法則に従って異なる形で生まれかわることに

なるのですか。それとも生まれかわる場所は全くの偶然で決まるのですか。

答 偶然なものは何もありません。各生涯が来世を作るのです！

原因と結果（因果）です。来世がどんな生涯で、どこであるかはだれにもわかりません。この地球上かもしれないし、どこか他の惑星上かもしれない。しかし、生まれかわりは常に異なる形で行なわれます。（訳注。性別、体格等が異なるの意）新しいドレスを着るのだとよいでしょう。

問 これまでにあなたの書物に現われた惑星人は金星、火星、土星から来た人だけでした。フランク・スカリーの書物にたいする注釈で、あなたは、他の諸惑星に住む「生物」はわれわれと同様の人間であって、地球人と全く同様だけれども、身長に多少の差違があると書いています。この三つの惑星の人だけが地球人に最もよく似ていると結論づけてよいのでしょうか。またこれ以外の諸惑星の人々はどうか。巨人ですか、小人ですか。身長三十フィートもあるという宇宙人はどこから来るのですか。それが真実であるとすれば。また「サルトン巨人」というのはどこから来たのですか。

答 地球へ来る惑星人が主として金星人と火星人であるというのには多くの理由があります。しかしかつて私は或る機会に七つの惑星から来た代表者たちと会ったことがあります。

前にも述べたように、この太陽系ばかりでなくおよそ如何なる惑星に住む人間も概して同じようなものです。この太陽系では最も背の低い人で三フィート少々、最大の巨人で十フィートに及ぶさまざまな人類がいます。三十フィートというのが本当かウツか

はわかるでしょう。「サルトン巨人」というのは宇宙服を着た宇宙人を恐れた人々がまき散らした話の拡大したものです。

問 テレビシーの能力を開発するのに何か特殊なよい方法がありますか。

答 あります。やさしく面白い方法をお伝えしましょう。光線の入らない暗い室の中へ入って、そこで未感光の写真用印画紙を両手ではさめるほどに小さく切って、それを一枚ずつ両掌のあいだにはさんで、何かの物品を思い浮かべながらそれが印画紙に写るようにと思念します。そしてあとからそれを現像しますと物品の写真が出て来ます。心中に鮮明な光景を描いたとたん、それが印画紙に「感光」するのです。これにはわずか一秒間しか必要としませんが、始めはもっと時間をかけてもよいでしょう。また最初は心中に簡単な線を描くこと位から始めて、次第に複雑な物品に進むようにして下さい。

問 今日だれでも旅行する場合には少なくともちょっとした土産物を家に持って帰ります。コンタクティールと宇宙人とのあいだに贈り物が交換されたというような話をなぜわれわれは聞かないのですか。遠い未知の惑星からもたらされた書物、紙その他の物品は有力な証拠物件になると思いませんか。

答 証拠とは何のことですか。われわれが連絡している他の惑星はこの地球と大差はないのですから、証拠物件の正当性は文句なしに疑われるでしょう。これまでに少数の贈り物が交換されたことはありますが、それは証拠物件にするためではありません。無数の空飛ぶ円盤が証拠にならないというのなら、個人的見地を満足させるのに一体何を持って来て見ればよいのですか？

私は金星から将来した金属片を所有しています。これは百パーセントの純度を持つスズです。その他金星と土星からもたらされた数個の品物を持っています。あなたはこんな物が証拠品として役に立つと思いますか？ もっとよく考えてごらんなさい。

問 円盤は人間以外の「知的生物」によって操縦されているというエイメ・ミシエルの結論をどのように解釈すべきでしょうか。

(訳注。ミシエルはフランスの著名な円盤研究家)

答 ばかばかしい結論です。そんな説は数年前に円盤はマルハナバチによって操縦されているとなえたのと同じほど病的な説です。

問 新生児が生まれる場合、いつ頃靈魂がそれに宿るのですか。

答 母親が妊娠した瞬間です。

問 人間の死後から次の生まれかわりまでにどれくらいの時間が経過するのですか。また十字架上でイエスが犯罪人の一人に言った言葉「あなたは今日私と共に楽園にいるだろう」は右の言葉と関係がありますか。つまり瞬間的に生まれかわることを意味したのですか。

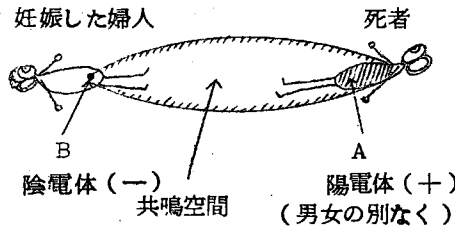
答 そうです。イエスが罪人に言ったのは生まれかわりのことです。しかし後世の人々はその意味を理解できないままにすごしました。

人間の死後(靈魂が肉体を離れてから)次の生まれかわり(一女性が妊娠した瞬間)までは、わずか数秒しか経過しません！

△編者付記 V 右の最後の回答に関しては読者によって意見が相違するだろうが、参考までに本誌誌友 T・W 氏(東京)の見解を

掲げることしよう。

「これは以前から私が正しいかと思っていた論理です。その理由は、人体から出た靈は静電引力で強く再生すべき体(大抵は婦人の腹中にある受胎体)に引かれて、のろのろと空中をさまようことができず、急速に空間を流れるはずで、最も速いときには光のように動いて転位するでしょう。



この共鳴空間の中を静電束が通っていて、AとBとの間に張った不可視の力場があり、Aがその肉体と縁を切るや、このゴムのような力場の縮む力つまりマクスウェルの歪みによって、Aは急速にBに向かい、Bと合する。

空間に電気抵抗がどのように分布するかで共振吸引の作用がいろいろの結果を生むでしょうが、まず普通には、死者の体から解離する帯電ガスは生物的に受胎された体(帯電球 || 卵子)に直行するものと考えられます。

しかしたまに人以外の何かの個体(鉱物、植物、動物を含む)の帯電異常から、一時そのような個体に吸着され得ることもあると思います。しかしこのような吸着を受けるようなときは大抵は

死者の意識状態が低級で、荒い振動の電気と共振を起こしたものでしょう。心靈研究者たちの言う「たたり」とかいうのは、たとえば或る人がごく低迷の振動性の帯電をしたまま死んで、一時仏像とか指輪に吸着され、自縛しているため、それに触れた人が悪作用を受ける、というようなものもあると思います。しかし、「たたり」には単に人の悪い精神波動が岩や建物的一部分に残留して、それが他の人に悪く作用するというのが案外多いようにも思います。死後よい所へ生まれかわるには、そのような所と共鳴し、共鳴引力が作用するように生きているあいだに心を向上させつつ振動を高める必要があると思います。宇宙人と会うのを最も効果的に実現させるには、彼らのような高振動の持主になり、彼らと共に鳴・吸引を起こし、おのずからチャンスが来るのを待つことであるうと思えます。

とはいえ、気がだれるとつい振動が低くなり、考えがおかしくなってしまう。宝クジでもあたって四百万位できないかなあ、そうすれば宇宙研究所でも作って円盤の格好だけでも製作して眺めたいものだが・・・などというおかしな考えが生まれてきたりします。アダムスキーの言うように気を楽にして、しかも気をだらけさせないという態度は正直なところむづかしいです。気をだらけさせるか、えらく緊張してしまうか、右翼か左翼か、とにかく極端になりやすいものです。ブラック（オリオンの悪魔）かホワイト（善なる人々）というような妙な分け方をする例の男たちのように、人間はつい変なけじめをつけたがります。しかし冷静になるためにはどうしても気を楽にしてしかもだらけさせず、大いなる心で万事を見る必要があると思えます」（九月八日付）

— 推せん図書 —



塩谷博士とルウ・ツィンスシュターク女史

◎「生物学的無線通信」B. B. カジンスキー著・西本昭治訳 ¥260 新書版
東京都大田区上池上町264、学習研究社発行。振替 東京142930

著者は1919年の或る夏の夜、友の死を告げる「銀のふれ合う音」を聞いて以来、1962年に没するまでの43年間テレパシー研究に打ち込んだソ連の科学者。副題が「ソビエト科学者のテレパシー研究」となっているのもわかるようにテレパシーを徹頭徹尾科学的に解明しようとした好著。

◎「世界林業行脚」塩谷 勉著 ¥450

B6版 東京都千代田区六番町7番地

著者は九大農学部教授。農学博士。林政

日本林業技術協会発行。振替 東京60448

学の権威であるが、超心理学や円盤のすぐれた研究者でもある。本書は昭和三十六年の八月から数ヶ月間ヨーロッパ各国へ出張された折の報告であるが、題名から受ける堅苦しさはなく、軽妙な筆致で描かれた楽しい旅行記。特にスイス、バーゼルの円盤研究者でスイスGAPリーダーのルウ・ツィンスシュターク女史やオーストリアGAPリーダー、ドラ・パウアー女史らとの会見のくだりは興味深い。著者は本誌誌友。

生命の科学	
3	
G・アダムスキー	

第五課 意識、英知、及び生命力

われわれは実際には目に見えない生命の海の中に住んでいます。そして以前にも述べたように、われわれは目に見える物と見えぬ物との両方に同時に気づくように自分を訓練する必要があります。なぜなら今日われわれは、接触している目に見える物にのみ精神的に気づいているからです。しかし万物は最低の物から飛躍して不可視の空間をのぞきたがっています。なぜそうならなくてはならないのでしょうか？ 万物はちょうど子供が指導を求めて母親を頼りにするのと同様に、その創造主を頼りにしているのではありませんか。そして空間こそ万物の出生地であるために、万物は自分の生まれた家族を頼りに、その家族の中で生きているわけです。

しかるに人間は自分の好みのままに生き、しかも自分自身と何ら異なるところのない他の結果（現象）によって導かれながら、

知覚力の最低の状態の表現にすぎない地上の生命体に自分を密着させています。

海中の動物でさえも水の上の光を見ようとするのがいます。また水という液体は、目に見えない水素と酸素がなければ存在し得ません。この不可視の状態において生命の要素なるものは、人間の視覚で見えることはできません。しかしそれは意識を通じて心を知ることはできます。というのは、意識は形ある物とは別個な英知であり力であるからです。それは万物を生かしています。意識は人間が分類しているような光輝や暗黒という振動を知ってはいません。また善や悪をも知ってはいません。善悪とは法則の誤用によって人間が分類したものにすぎないからです。

人間にせよ何にせよ意識を離れて生きることではできません。なぜなら意識の外側にいればそれは完全な無となることを意味するからです。したがって万物の両親である意識なる師に人間が心を向けるのは人間の義務なのです。

さて、心を、意識的な行為の観察者たる意識との関係の中に置いてみることにしましょう。これについては海岸を例にあげることができます。われわれは広大な海面を眺め渡すとき、その中に無数の生命体がいることを知っています。そこでわれわれは、センスマインドが見ることでできない、海中深く起こっている活動について意識的に気づくようになる必要があります。今やわれわれは多くの生きものから放たれる印象を通じて意識的に知覚するようになり、食物を求めて海中深くあさり歩いている一粒の砂ほどの微小な生命体を見るようにしなければなりません。そして海底から水面に至るあいだに同じことをやっている無数の生命体を

知覚しなければなりません。

他の動物にもいますが、クジラは海中の水圧や諸要素を制しています。というのは深海にもぐることもできれば、また水面上をも泳ぐこともできるし、地球を包んでいる空間の不可視のガスを吸うこともできるからです。またそのガスの海の体験を求めて海水を離れるトビウオのようなものもあります。こうしてこの動物たちは二つの異なる世界の体験を持つわけです。液体の世界とガスの世界です。

人間も、同時に二つの異なる体験下で生きていることを知覚するようにならねばなりません。人間は三次元の地球上で住んでいるが、しかも四次元の中で生きているからです。地殻から上方の空に向かってわれわれが空間と呼んでいる不可視の四次元の世界があるからです。人間は土地がなければ水なくして生きられない魚と同様に生きることができません。形ある物は四次元の支持なくして生きることができません。地上の生きものが生きて呼吸するのはわれわれが大気と呼んでいる空気であるからです。それがないれば万物は生きることができません。地球でさえも存在できません。(訳注。この場合、空気の満ちた空間を四次元といっているのではない)

人間の苦悩は四次元世界で始まります。「肉体の心」としての人間は原因の結果である三次元世界で働いているからです。それゆえ人間は結果の世界に多くの時間を与えていて、それを(結果の世界を)かなりよく理解しています。しかし人間は自己の周囲の不可視の世界と自分の住んでいる世界とを結びつけようとしてひどく苦しんでいます。そして四次元を理解しようとして意識の

かわりに心を用いながら混乱しています。そして原因であるところの不可視の四次元世界があまりに大きく相違するために、長いあいだ三次元世界で教えられたように四次元世界を理解するのは困難になっています。古代人でさえも四次元を理解しませんでした。もし理解していたなら天と地、原因と結果というふうに分類しなかったでしょう。

時間の始まり以来、人間は自分と同じような三次元の具体的事実を望もうとして自分を訓練してきました。四次元を神秘的な伝説にしてしまったのです。わずかにあちこちで個人的にあらゆる次元の関連点を見ることができただけです。そして本人がその神秘的体験を表明しようとする大抵はだれも相手にしないのが普通です。

イエスはかつて四次元を説明しようとしたが、今日でさえも彼の教えは理解されていません。その結果、今後理解されるだろうという望みのもとに四次元は生命の抽象的な側に置かれてしまったのです。しかし人間は今それを理解しなければこれから先それを理解できる機会はないでしょう。人間は次にとるべき段階を知ってからその動機を理解できるのです。

時間という財産は、未来が安定する前に持たねばならない、理解力、ほどに大きなものではありません。理解力がなければ、われわれの宇宙の兄弟(他の惑星の人々)が有している知識を地球人も持つことを望み得ないからです。

人間は三次元世界について多くを学んできました。今はその知識を周囲の四次元の不可視な世界と結びつける時です。ただし人間がずっと支配されてきたもろもろの神秘を捨ててしまおうとす

ればです。このことは、結果である心を原因である意識にたいして謙虚にならせることによって達成されるのであり、こうして兩者の関係を意識に説明させることとなります。意識は限界を知らない四次元であるので意識のみがこれをなし得るのです。

三次元の結果の世界は表現のより粗雑な部分であって、これは低い摩擦の状態によって生み出される音響のようなものです。しかし四次元における意識はわれわれが知っているような音響を生じません。その伝達の方法は印象というかたちで与えられる感覚的知覚によるのです。

それゆえ現在人間の中で分割されているものを結合するためには、心は喜んで意識から教わらねばなりません。忘れてならないのは、意識は生命を可能ならしめる、万物の魂であるということです。

もっと明確に理解するために、海岸の例でやったように地球の周囲を考へてみることにしましょう。そして空間の諸物質について意識というメッセンジャーが心に洩らすように仕向けることにしましょう。先ず、この不可視の状態の中に何かが存在するといふことにします。そして以前に述べたように、それは地殻で始まります。

科学者は、宇宙空間に向かって進行する各種のガスについて知っています。ガスという言葉はさほど意味をなしません。重要なのはガス類を構成する成分です。なぜならこれらの成分の中に三次元世界が生きるために必要とする食物が存在するからです。一例としてこの講座中でたびたび引用してきた次のような現象をおげることになります。われわれが晴れた青空を見つめるとき何も見

えませんが、或る条件下ではその空間に電光が生じます。それは地上でよく知られているミネラルでできています。このことは、われわれがガスと呼んでいる物質の構成成分は固体を生じ得る物質を有していることを示しています。これだけが唯一の証拠ではありません。他にも類例があります。多数のイン石が地上に落下していますが、検査してみるとそれらは地上で知られているミネラルを含んでいます。このイン石なるものは地球から発射されて再び返って来たものではありません。イン石というのは月や他の惑星にも落下していますから、電光と同様に宇宙空間で作られた物に違いないのです。このことは、地上で知られている粗雑なかたちのあらゆる元素は、元のかたちが宇宙空間で精化された状態として存在していたことを証明することにもなります。前にも述べたように、宇宙空間は惑星や万物を生み出すフ卵器のようなものです。

地球上にある万物を地球が自ら生み出したとし、地球は宇宙空間の諸元素から生まれたとするならば、このことはあらゆる惑星がさまざまな発達の程度にある生命体を抱えて活気を呈しているというよい証拠になります。

たとえ各惑星間には莫大な距離があつて、そのあいだに連絡が確立されていないとしても、このことは各惑星上で発生している事柄を知るのに妨げとはなりません。しかしこれをなすには心が意識の方に耳を傾けるよう訓練し、意識というメッセンジャーから教わるようにしなければなりません。与えられる印象にたいして心が疑念を起こしてはいけません。印象のなかには想念のかたちで来るのもあるでしょうし、光景を伴うのもあるでしょう。

これについて考えるとき、海岸から海を眺めたときと同様に心を注意深い状態にする必要があります。海には限界がありますが宇宙空間にはありません。われわれが宇宙船で宇宙旅行をし始めたときさえも、この段階の発達はきわめて重要でです。なぜなら私がこの線に沿って或る程度発達していなかったならば、肉体のまま行なわれた私の宇宙旅行はほとんど価値のないものとなったと思われるからです。また船内や宇宙空間には私の心が理解できなかった多くの物があつたからです。しかし私の意識がそれを私に洩らしました。そして後になって私の理解力は確認されたのです。言語の障壁はありませんでした。或る場合に私は宇宙人と意識的にアイデアを交換したからです。心を応用したのではこれは不可能でしょう。

心の訓練は容易な問題ではありませんが、私のようにそれを達成するのに多年を要したとしても、やはり努力する必要があります。宇宙ばかりからでなく地球の住民から来る印象、または他の惑星から来る印象を受けない人はこの地上に存在しません。しかし人間から来る印象と宇宙の印象とのあいだには差があります。というのは、この地球にせよ他の惑星にせよ心はあくまでも心なのであって、それは印象を混乱させ、それを（印象を）個人的な欲望に適合させるために誤用する傾向があるからです。しばしば心は激しく空想力を高めます。空想はキャンヴァスまたは石盤上に描かれる絵画のようなもので、人間はその絵をゆがめがちです。たとえば、空想では石盤上に犬をつれたノミの絵を描くことができますが、創造主による「宇宙の計画」においてはそんなことは絶対にありません。つまり絵は法則の置き誤りを表わしている

のであって、これこそ人間が真理を知るためにきわめて注意深くならねばならぬ点です。このことは現在多く行なわれているのであって、だからこそわれわれは宇宙人問題について多くの混乱を起すのです。これは個人の自我を満足させるために真の法則を誤用することによって起こります。そこでこの源泉から不自然な物語が出てくるのです。

こうした乱れた印象から自分を防ぐには、他の惑星の人間もわれわれと同じ人体を持っていることを忘れてはなりません。人間の原型は宇宙的であるからです。相違といえば人体の洗練され具合と知識の広さ位のものでです。しかし最低度から最高度に至る段階が存在するという類似点があります。創造主の「宇宙の計画」中には空白がないからです。奉仕の分野において宇宙の意識によって導かれる人は分割を知らず、全体との関連においてあらゆる現象面を融合させます。理解力を持つ人には分裂や差別は存在しません。訂正のための分析と法則の誤用の理解が常に行なわれま

す。心がもし乱れた空想または審きなどにふけらなければ、意識を通じて感受される物事の内容は正しいとみてよいでしょう。その印象がときとしてただちに理解されなければ、必要なのは忍耐力です。啓示というものが存在するという事実は、適当なときにどこかでそれが（啓示が）現われるという確信をあなたに与えるでしょう。

自分に洩らされた事柄を世間にしゃべろうというほどに心が感情的にならないようにしなければなりません。啓示が来るとき、それはそっと与えられるからです。ところが、心が育てて蓄積し

てきた多くのトリックがときどき現われて「心はこんなによく知
 っているんだぞ」と仲間の心に話しかけようとします。これは全
 く誤っています。したがってもしこのような状態が起こるならば
 次の言葉を思い出す必要があります。「他人からしてもらいたい
 と思うことを他人にもせよ」心は長いあいだ虚偽の物事の中に住
 んできていますので、真実がもたらされても、心は誤りの上に基
 礎を築いているためにその真実を受け入れようとしませんし、そ
 の誤りをかき乱されることを好みません。しかし前述したように
 誤りには価値がないというわけではありません。やはり誤りによ
 って正しく行なうべき道が示されるからです。だが一つの誤りは
 他の誤りによって覆われてはいけません。ただちに訂正すべきで
 す。

自分が過失をおかしたかどうかについて確信がもてなければ、
 結果を注意深く分析してごらんなさい。誤りをやったと感じるな
 らば訂正する方法が示されるでしょう。もしその訂正の方法が他
 人と対立することになるならば、その他人になりなさい。そうす
 れば時間の損失なしに何をしたらよいかがわかります。あらゆる
 過失は人間の宇宙的印象から切り離し、二点間に真空または空隙
 を生じさせます。これは電話が通話中に切れるのと同じです。こ
 れが電話線の故障によって起こるとし、話し手がその故障に気づ
 かないとすれば、話し手は送話し続けますが、聞き手は印象を受
 けません。修理されるまでは印象を受感しないでしょう。そこで
 通話はとどえてしまつて、空隙は混乱で満たされることになりま
 す。こうして感受されるべきはずの事柄はゆがめられてしまいま
 す。

訂正されない過失が他人に対立する場合、決して解決されない
 神祕が生じます。そして一定の時間の経過後に神祕が生じるなら
 ば、本人の「感じ」は元のそれと同じではありません。そこで訂
 正を無視したことによってロスが生じるわけです。しかしこうし
 た状態下にあつてもなお訂正はきわめて重要で、なぜなら、そ
 の線に沿つたどこかで、失われた言葉または印象が、たとえ別な
 理由のためであっても、自らをくり返すのであろうからです。

人は過失を避けようとして過度に用心深くなつてはいけません。
 過度に用心深くなると何事もできなくなり、これは価値があ
 りません、重要なものはなるべく早く過失に気づいてそれを訂正す
 ることです。なぜなら、人は言葉または交際によって自分に適し
 ている物を見失うならば、それを発見するのに数年、数世紀をも
 要するからです。自分の現世のすべてともいうべき物を探し求め
 ていた人々を私は知っています。彼らは自分が何を求めているか
 を知っているときもありますが、知らないときもあります。しか
 し彼らはそれを見い出す時機を知っています。なぜなら不安定な
 神経感覚は消えて、彼らはあたたかく楽しい感じを持ち、行な
 っているあらゆる物事を楽しんでゐるからです。彼らは未来に関心
 はなく、日々を満足して楽しく生きてゐるようによ見えます。しか
 し彼らはなし得るすべてを学び取るとういう意欲を持っていて、
 自分の望む物を持っていると思われの人々との関係を求めます。
 これは空隙すなわち人生のどこかで失われた物を満たしているよ
 い傾向です。

しかしこれを見い出した後も迷う人があります。こんな人は無
 数にいます。しかしこれが起こると一つ以上の裂け目が生じ、

ときとしてこれらの裂け目を埋めることが不可能になります。人間の心は多くの場合に怠惰であり、最も抵抗のない楽な道を求めようとするからです。こうして心は生涯に多くの裂け目を作り出します。そしてこうした心を持つ大衆は眞の幸福、平和、満足を決して知りません。その証拠は彼らが生活態度を誤っていることに表われています。すぐにイライラしたり、不平を起したり、絶えず文句ばかり言い、きわめて貧弱なスポーツマンシップを示したりします。そしていつも自分と同じような性質の浮わつた新しい友人を求めます。

こうした人たちはうっそうと茂った森林の中で道に迷った人に似ています。そこでは繁茂した樹木が、正しい方角を示してくれず、太陽や天空の光景を隠してしまいます。樹木は、道を示してくれるはずの光をさえぎる。個人的な意見にたとえてよいでしょう。こんな状態のなかで死んでしまつて生命の眞の目的を知ることはない人もあるでしょう。この世の中には必要以上の莫大な財産を持ちながら、本人の内部はきわめて不幸だという人がいます。そして自分の理解できないものを求めて生涯を探し続けます。本人は身の保障のために富と名譽とを求めたのですが、それを所有した後も切望した幸福はやって来ません。本人が、自我の意見にすぎない森林地帯を脱していないからです。したがって本人の人生の価値は宇宙と一致していません。

自分が探し求めている物は実は自分の、半身なのであって、自身の個人的意見、という暗黒の中では発見できないということとを本人はほとんど知っていません。なぜなら、これは本人が全然享受したことの無い意識という光の中で発見されるからです。

しかもその光は常時存在していて、ときどき森林地帯の暗黒を貫くのですが、本人はそれを見ることも理解もしません。ところが意識という光に従つて出口を発見し、広野の自由を感じてそれを楽しむ人もいます。この人たちはそれまで決して知らなかった永久の保障を体験します。しかし自分が何を発見したかに気づかない人は再び暗黒の地帯へ引き返して結局は迷つてしまふのです。こうして彼らは暗黒の森林を作り続け、そのために時が経過するに従つて出口を見つけるのがますます困難になります。

以上のことで死んだ妻のメリーが体験した一事件を私は思い出します。或る夜メリーはわずか半エーカーばかりの土地に高く生い茂っているライラックのジャングルの中で道に迷つたのです。彼女は恐れて大声で助けを求めました。家から五百ヤードしか離れていない場所なのに。このことは、宇宙の目的に反する、自我の意見、というジャングルの中で人間というものが如何に迷いやすいかという例としてあげました。

人類の九十九パーセントがこの種の、心というジャングルの中で生きているというのは不幸なことです。この人たちが意識を楽しむことができるならば、それは(意識は)人間が必要とするあらゆる物を持っていることがわかるでしょう。心がつながれてある恐怖をのがれて生活を楽しむことができます。気高い宇宙人にかわつて私がここで言えることが一つあります。それは、彼ら惑星人の心は宇宙の意識に従っているということです。たとえ心の行使が完全ではないにしても、彼らはいつかは完全に行使するようになるでしょう。彼らは意識の指導に従っているからです。

次の第六課では若々しい肉体を保つために、「新鮮さ」の重要性について説明しましょう。

第六課 「新鮮さ」すなわち人間の若返り薬

前課では心が意見というジャングル中で迷いやすい有様を説明しました。

肉体は心とは独立している一方、他方では心に関係してそれに服従している或る種の細胞群を持つことはご存知でしょう。これが人間が日常起こす争いの原因です。心は習慣を守り怠惰になる傾向があります。心は段階を必要とし、しかも未知である進歩の道を行くよりも、ほとんど抵抗のない道を行きたがります。だからわれわれは現代の生活に即応しない昔の伝統や因襲に悩まされるわけです。しかしそれでも心は好みの如何にかかわらず時折物事を受け入れねばなりません。

古臭い主義のもとに生きることをいさぎよしとせず、常に何か新鮮な物を探し求めていくごく少数の人々がこの世にいることにわれわれは感謝してよいでしょう。激しい勢いで、しかも理解力をもって、一層よき生活の方向へ大衆をアツリながら引きずり続けているのは右のクラスの人々です。大衆はきわめてゆっくりと動いています。それで、もし大衆を新しい生活へ向かわせるこのクラスの人々がいなかったならば、大衆はずっと昔絶滅していたかもしれせん。しかしその少数者が大衆にもたらす新鮮さは、ゆっくりと、しかも確実に大衆を生き続けさせています。

新鮮さは進歩であるばかりでなく若さでもあります。また今日

新鮮さが社会に及ぼしている影響について多少の証拠があります。昔と違って、今日は年令を取らない人が多数増加しているのを見ることができますが、これは科学的発見の行なわれる今日、ほとんど毎日のように何かの新しい物が人目を引いているからです。人間とは活動する想念以外の何物でもありません。ゆえに何かの新しい思想、特に宇宙的性質を帯びた思想は人間の肉体に影響を及ぼすのです。

人間とは想念であるという点を明らかにしましょう。人間またはその他の動物のように形ある肉体を作るためには、その形成が何者のせいであろうと、創造する前に創造主は肉体の「想念による原型」を持つ必要があったのです。人間は思考する実体です。というのは想念は人間の存在のための刺激的な力であるため、もし人間が考えることをしなければ生きておられないからです。人間は歩いたり食べたりする前に考えねばなりません。それで、何を行なおうとしてもガイドとして一つの想念を持つ必要があります。そしてこうした想念は過去の体験の蓄積、他人との交際、または宇宙的印象としてやって来ます。

さて、如何に異なるタイプの想念が現われるかを観測しましょう。もし怒りの念が心に入ると、顔付きは怒りを表現します。楽しい想念が起ると顔は楽しくなってくるなどの変化が起ります。これは心に持っている一つの想念を粘土で形に表わす彫刻家と同じことです。それゆえ想念とは、それが何を表現しようとも彫刻家のようなものなのです。想念が自らを表現するために顔の表情を作るからです。したがって若々しく健康な、よく均整のとれた肉体を望む知的実体たるわれわれは、常にそうした

想念を持たねばなりません。そのパターン（型）に従って肉体を形作るからです。肉体が若さを保とうとすれば、特に宇宙的な線に沿った新鮮な想念が重要です。

各時代のもろもろの大師たちは一つの宇宙の原理を教えました。「人間は自分で考えたとおりの者になる」という原理です。金星の人類は長く有用な生涯をすごします。なぜならこの人類は常に新鮮さという見地で思考しているからです。地球の年令に換算して五百才になる金星人が若々しく見え、元氣盛りであるのです。しかるに地球人は四十才にもなれば七百才になる金星人よりも老けて見えます。われわれは年令という見地でものを考え、数千年も続いた習慣で支配されています。あなたは古いマントを着て若々しい気持を起こすことはできません。そのマントがあなたに或る影響を及ぼすからです。上等な生地で作られていても古いドレスやスーツなどはそれを着るたびにあなたに古めかしい気分を起こさせるでしょう。古臭い想念もこれと同じです。反対に、新しい衣服はわれわれに若々しい感じを起こさせますが、同様に新鮮な想念を絶えず持ち続けるならば肉体も若々しくなるのです。

しかし、新鮮な想念がわれわれが望むような結果を得ようとすれば、想念に優先権を与えることにし、これと対抗的な想念とを混ぜてはなりません。なぜなら混ぜ合わせると肉体内に闘争をひき起こし、その結果は必ず悪しき状態をもたらすからです。最初は良き想念を保ち続けるのは容易なことではありませんが、決意こそは望ましい結果を達成させるのです。

この講座の始めの部分で、肉体と関係があつて、心から命令を受ける細胞群について述べました。九十パーセントに及ぶこれ

外の細胞は意識から命令を受けます。しかし肉体の細胞のすべてを意識から来る命令に従わせるように仕向けることはできません。これこそ自分を長生きさせようとする場合に、やらねばならないことなのです。

集団化した細胞の一例をあげましょう。先ず心と関係のある細胞について述べます。肉体は燃料を必要としますので、心は過去の習慣に従って食物を摂取するのに抜目がありません。しかし前にも述べましたように、食物が肉体内に入つて来るとき、心はそれをどのように扱うべきかを知りません。だがこの処理法を心得ている一団の細胞がいて、心が何か他の事で浮かれ騒いでいてもこの一団は仕事を遂行します。私は次の例を講演などで何度も引用してはなはだ効果がありません。ここで再び引用することにししましょう。一度食物があなたの体内に入ると、心とは別個な英知が食物を扱う仕事を続けます。この英知ある働き手を四つのグループに分けることにします。各グループは他のグループの利益のために働いています。

先ず第一のグループは発酵作用を起こします。第二のグループは抽出される化学物質の完全な混和を行ないます。第三のグループは発酵中に作られるガスを排除します。第四すなわち掃除グループは残された老廃物質を捨てます。この過程が自然に行なわれるならば、あなたは決して病気を知らないでしょう。しかし心に関連している細胞群が、心が怒気を帯びることによって右の正常な作業を遂行している細胞の各グループに干渉するならば、如何なる不快な結果が起こるかとはみな知っているとおりです。このことは宇宙の設計が規律正しいことと、心は安定しない物なのであ

ってガイドを必要とすることを示しています。

前述のとおり、肉体は無数の細胞から成っていて、その細胞は肉体の維持を果たすためにグループ別に分けられています。これは宇宙の構造と異なりません。また肉体はそれを支える宇宙の力のすべてを蔵しているのです。ゆえに人間の心が自我のかわりに宇宙の設計のために働くならば、如何なる不快な結果をも決して知ることはありません。そのとき心はあらゆる差別、審き、好き嫌いから解放されるからです。

足指の細胞群は手の指の細胞群とは異なりますが、各グループは肉体を完全な表現体にするために互いに協力し合います。そして或る同一の力と指導があらゆる細胞に等しく適用されています。これは地球の細胞構造における宇宙的表現と同様です。無機物の最低の表現から自然界の無数の物質に至るまで同一の力と英知がさまざまな程度に現われているからです。この法則は不変であり、或る一個の肉体または惑星を他の物よりもよけいに特別扱いしようとはしません。

人間と自然とのあいだの唯一の相違は、自然は自身の意志を持たないということです。というのは、前述のように、自然は、**“全包容的な英知”**の意志のもとにあるからです。しかるに最高の表現としての人間は自由意志的な心を与えられています。人間が苦悩を持つのは実にこの点にあるのです。一つの結果としての心は、宇宙の意志に自らをゆだねようとはしないで、他のものもろもろの結果によって導かれようとしています。人間が自由意志的な心を与えられた理由は、人間が生活の方法と目的とを、**“至上なる英知”**から学び取るかもしれないという点にあります。人間は創造主のように

なる可能性を持っていて、イエスが言ったように「私と父とは一体である」のです。だからあなたが他人を見るときは、**“父”**を見ているわけです。金星人や他の惑星人は自己の心を意識の指導にゆだねることによって、このことを日常表現しようとして努力しています。われわれも自己の目的を果たそうと思えばこのことをなさねばなりません。

しかるに地球人は数千年続いた生活法のために習慣に墮した人間となつてしまい、心に関連した習慣的な細胞群を作っています。そして習慣は自らの（習慣それ自体の）食物に餓えています。たとえば飲酒家の心は極端に酒を飲むのは肉体によくないことを知っていますが、習慣が心の主人となつていて、習慣に抵抗しようとする自らの意志の力と決意とを心は失ってしまったため、それは（心は）習慣の奴隷として存続しています。このことはあらゆる習慣にあてはまります。習慣のほとんどは極端に作用するからです。ただしこれはあなたが一滴も酒を飲んではいけません。意味ではありません。何事でも適度にやればそれでよいからです。むしろこれは、人間は習慣を自分の主人にさせないで、自分が自分の生活の主人になる決意を持たねばならぬことを意味します。そしてこれは、無限の力と知識とを持つ意識にその家を（肉体を）整頓させることによってなされ得るのです。

ひとたび心が、その生涯中に多くの不快事をひき起こした自らの弱さに気付くならば、最初は苦痛と感じて、しよせん意識による指導に自らをゆだねなければなりません。その際の障害は次の場合に起こります。すなわち、心がたとえ自分のわがままな行路において多くの過失や不安に出会ったとしても、自分がわがも

の顔に振舞っていたあいだに固持していた自分の正体と權威とを失ったという恐怖の念が起る場合です。なぜなら心は知識を持たないために、過失をくり返していた当時の乏しい知識と大差のない知識しか持たない自分は（心は）さまざまの結果に（現象に）頼っていたからです。

これは、自分の子供は何も悪い事をしてはいないと思いがちで、子供を矯正しようとしぬい母親と同じようなものです。結局子供は母親と共に苦しむことになりす。子供の内部で目立っていた弱点をなくすことが母親にできなかったからです。これは子供の弱点を認めるのを恐れた母親の責任です。そして矯正するどころか弱点に弱点を付け加えます。ついに母親は真実に直面しなければならぬときが来ますが、もはやそれを避けることはできず、矯正は次第に困難になってきます。

自分の命が助かりたいと願う者はそれを失うことになるのだとイエスは言っているではありませんか。これはエゴが自身を意識にゆずり渡すことによつて起る恐怖を意味するのではないでしょうか。これはまたわれわれが神と呼んでいる創造主を信じないことでもあります。イエスは次のようにも言っています。「自分の生命を捨てる者は永遠の生命を得るだろう」この意味は、エゴの意志を意識の意志にゆだねる者は永遠の生命にあずかるということです。意識は永遠であり、万物を支えているからです。したがって意識がなければ個体は存在しません。無意識な個体は死体であるからです。

人間が自己の心中にあると感じて探し求めている幸福は、人間が自己の意志を意識の意志と融合させて見付かるのです。これは

水中で他の水と融合する水滴が海洋の広大さを知り得るのと同様です。人間がこのことに気付くならば始めて自己の眞の正体を知ることになります。そうなればもはや影の中に生きることも、風が吹くたびにそれにゆさぶられることもなくなるでしょう。そして放蕩息子が家に帰るとき、天には歓喜の声があがるでしょう。しかしこれには各人の側に絶大な決意と不動の信念とを必要とします。人間は自己の利己的な自尊心を捨て去り、自分にもたさるるすべての物に直面しなければならぬからです。

聖書中の放蕩息子の物語は、どうすればよいかについてよい観察力をわれわれに与えます。放蕩息子の心はあらゆる人間の心（複數）を描いたものです。なぜなら帰ろうと決心したあと、彼は家のだれかが自分を指して自分の悪い行爲を思い出させることを息子はよく知っていたながら、自分を謙虚にし、自分の自尊心のすべてを投げ捨てて、もたらされるすべての物事に直面しなければならなかったからです。息子は家の者たちの生活態度は自分のそれと異なることを知っていました。しかも彼らは息子が経てきた体験を持っていません。これらすべてを知っていたながら息子はなおも自分の心の意志を征服して、自己の眞自我である意識の意志——万物の父——のもとへ帰ろうと決心したのです。

家へ到着したとき息子のエゴは驚きました。というのは父親が息子のために宴会を開き、あたかも何事もなかったかのように腕を開いて歓迎したからです。エゴが自らを指導しようとするほど大きな勝利はなく、その努力にたいする報いは無限なのです。そして各個人は生活の必要物すべてがすでに与えられているのであって、何も不足している物はないのです。

この放蕩息子内部には、悪い事をしたのだぞと自らに罪を負わせた一つの小部分がありました。それは家を出たことのない長男によって象徴化されています。あらゆる個人には本来の生気があるからです。それが迷える者にとって本来の場所へ帰って行くとする唯一の希望となるのです。そこでその本来の生気が放蕩息子にその行為を思い出させたわけです。しかしこれはまもなく、宇宙的意識によって克服されました。その意識は審きや差別を知らないからです。しかしこの勝利を勝ち取り、宇宙の意識という海の中へエゴたる自我を滅却させるには大いなる決心を必要とします。

これはイエスが言ったように、心を新生させて個人が新たに生まれかわることを意味します。なぜなら、自我の自尊心が、宇宙の意志と栄光の中にただ生まれかわることを望むときに、人間は実際には死ぬことになるからです。(訳注。これは肉体の死を意味しない)これは前述のように、海水と同化することによってもはや一滴の水ではなく海洋そのものになる水滴と同様です。

あなたが如何に多くの書物を読もうとも、如何に多くの宗教を遍歴しようとも、如何に多くの講座や教師につきろうとも、放蕩息子がやったようにやらなければ、これらは何にもなりませんし、真理をもたらしません。自我のプライド(自尊心)を死滅させて、謙虚さと、意識の意志の中に生まれかわりなさい! だからといって、あなたが今の生活で楽しんでる物事を捨ててしまう必要はありません。ただ、極端にやっている物事を適度にやればよいのです。そしてあらゆる生命体や、個体を作り上げているあらゆる細胞の中に現われている、神を見るように自分

の心を仕向けなさい。あらゆる生命体の生命や細胞の生命は万物を通じてさまざまの度合に現われている神の生命であるからです。そうなれば、あなたは金星人や他の惑星人がやっているような生き方をし始めることになり、あなたの生活に差別というものは存在しなくなります。これをなし得るとき、あなたの心はこれまで知らなかった大いなる美と平和に満ちた物事を見るでしょう。そしてあなたの肉体は完全さの証拠を示すでしょう。

以上のすべては、あなたが他人からどんなふうに使われたかという感情と同様にあなたの内部に今あるのです。ゆえにその同じ感情をあらゆる生命体に返せばよいのです。一回や二回の試みでうまくゆかないからといってあきらめてはいけません。その立場をマスターする決心を強めればよいのです。あなたが決心を強めれば強めるほど結果はますますよくなってきます。

最初それは不可能事のように見えるでしょうが、あらゆる物事は一時不可能に見えるのであって、幼児が歩行を学ぶときでもそうです。不断の努力は成功をもたらします。人間が地表に金の鉱脈を発見することはめったにありません。真実を探し出すには深く掘る必要があります。

才能というものはそれを応用しなければ何の価値もありません。かりにあなたが大芸術家の才能を持っていて、それに気付いているとします。しかしあなたはそのことをただ考えたり夢見たりするだけです。したがってそれを実現させることができません。だからその才能から益を得ることはありません。自分の夢を実現させてそれを達成し得るということを自分自身に証明することもありません。したがってあなたの才能に関する夢や折りのすべては

依然として未知であり、夢の状態のままにあります。これはあなたが自分の隠れた能力を現わそうと決心するまで続きます。決心するときにこそ、それは真実の、やり甲斐のあるものだということを自身に証明するでしょう。自己発達はこのようなものであって、これまでに述べたすべての潜在能力はあなたの内部にあるのですが、それに実を結ばせない限り何の役にも立ちません。

あなたの日常生活において自分の能力を現わすことによって、その能力を再建しなさい。そうすればあなたはこれまでに意識的に気づいてきた物事を実行できることがわかるでしょう。するとそれはあなたに役立つばかりでなく、自分の実例によって他人にも役立つでしょう。

これまでさまざまな実例が示されてきました。たとえば、一独裁者が人民を支配しようとするとき、他にたいするみせしめとして自分に反抗する者を殺します。こんな野蛮な方法で実例が示されることもあるというのに、われわれが世間にたいしてすぐれた実例を示せないことはありません。われわれはそれを行為で示せるのであって、単なる言葉や夢で示せるではありません。これは物事を実行することによってのみなされるのです。われわれは他人にたいして正直で誠実であり得る前に、自己の「良き自我」にたいして正直で誠実であらねばなりません。他の意識的実体が自分を信用してくれることを期待しようと思えば、自己の意識を先ず信用しなければなりません。

また、真実の生き方を知らない多数の人々のあいだにあって、この新しい生き方をするには、不動の信念と忍耐力とを持つ必要があります。なぜなら人間というものはそんな考え方をただち

に把握しようとはしませんし、一般人はきわめてゆっくりと変化するからです。しかし生存し続けようと思えば変化しなければなりません。またあらゆる分野の先駆者は、よき結果をもたらそうとするのなら、強くなり、断固たる決意を持たねばなりません。われわれは岩盤の上に基礎を築くべきで、崩れやすい砂上に築いてはなりません。そうすれば自分の生活に雑多な抵抗が嵐を起こしても堅固に立つことができ、吹き飛ばされることはありません。

われわれが得ようとするゴールこそ問題になるすべてでなければならず、それにたいして障害物を介入させないようにすることです。

(第六課終り)

(33ページより)に宿るといふア氏の回答でわかるでしょう。この説もア氏が他の惑星の人間から伝えられたということになっていきます。これについては教科書に掲載されるほどの科学的な理論が確立されていないために、大方の批判にたいして如何ともなし得ませんが、T・W氏の見解は何らかの参考になると思います。

◎結局一般人が起こすトラブルのすべては無知に起因する恐怖・不安の結果であるというのは真実でしょう。問題は恐怖を除去する方法です。しかしそれはあくまでも個人的なものであって、画一的、全体的なものでないことは明確です。ゆえに大衆催眠術を極力避けるべきでしょう。「求道」とは個人的なものだと言えるでしょう。

◎私は音楽を愛好し、へたながらも多年クラシックギターをやってきました。好きな曲はソル、タルレガ、ヴィラロボスなどの作品です。この方面に興味をお持ちの方はご連絡下さい。(久)

— 編集後記 —

◎今回の編集までにハニー氏の「テレビショー講座」が間に合いませんでしたので、かわってアダムスキー氏の記事をふやしました。「レインジャー七号、恐怖、その他」はアダムスキー発行の「ゴズミック・プレティン」九月号の全訳です。

◎先般デンマークGAPのハンス・ペテルセン少佐から「ヨーロッパからの報告」と題する書籍一冊が送られてきました。これは昨年四月から数ヶ月間アダムスキーがヨーロッパへ講演旅行に出かけた際、デンマークの大会で行なわれた質疑応答を主として集録したもので、未発表の情報をも多数含んでおり、はなはだ興味深い書物です。今号から「質疑応答」としてその内容を連載します。

◎アダムスキーは人間の不可視の構成要素を心と意識の二つに分類していただきますので、「生命の科学」講座ではそれを心と意識というふうにご承知してあります。すでにご承知のように、心とはア氏の言う「センスマインド」のことであって、これは主として視覚、聴覚、臭覚、味覚の四つの感覚器官によって形成される自我の心であり、肉体の心ともいうべきもので、肉体の崩壊と同時に死滅すべき性質のもので、一方、意識というのは、「頭を強打して意識を失った」とか「無意識に柱にしがみついた」とわれわれが一般に表現している「意識」とは異なって、失神状態にあってもなおお人体を生かし続ける普遍的な「英知ある実体」です。それは「宇宙の心」ともいうべきものでしょうが、どうも言葉で表現するのは困難であって、実感的に体得すべきものなのでしょう。

◎個人の自我の心すなわち心を意識に融合させると奇跡が生じるといふのは当然と思われまふ。各種の宗教団体で発生する奇跡、たとえば奇妙な治病例などは、本人がいわゆる「無意識に」右の

融合状態を起こす結果であると考えられますが、信者のすべてが必ずしもそうならないために、一方では宗教それ自身が人間の眞の覚醒にとって障害になるとも言えます。或る宗教から入信を強いられて困るという便りが時折来ますが、宗教はクリシュナムルティーが言うように、一種の催眠術を結果的には応用して、信者間に陶酔的な同調現象を発生せしめていますから注意を要すると思ひます。「自分たちの宗教を信じなければ救われないぞ」と威かくするに至っては憐れまざるを得ません。信者自身が「如何に考えるべきか」という問題を考える力を失って、芝居じみた自分の態度を自己観察できないほどに盲目になっている例をよく見かけますが、数千の信者の集まった熱狂的な雰囲気は、センスマインドの巨大な集大成以外の何物でもないと思われまふ。それはすなわち独善と恐怖との大ピラミッドであるとも言えるでしょう。

◎アダムスキーは靈魂の存在を否定しているという説が流れたことがあります。私が知る限りア氏はこれまでの膨大な論文中でそんな説を唱えたことはありません。ア氏が否定しているのは靈魂ではなく靈界です。これは肉体の死後、靈魂が瞬間的に他の肉体

(前ページへ続く)

日本GAPニュースレター	1964	9月・10月号
翻訳編集発行人	久保田八郎	
発行所	日本GAP	
	島根県益田市益田古川	
	振替 松江二六三〇	
	(久保田八郎個人名義)	
昭和三十九年	頒価一〇〇円・送料二〇円	
十月十日発行	☆一カ年分送料共七〇〇円	
隔月刊		
通巻第24号		